

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

ヤノベケンジ

現代美術作家

Kenji Yanobe / Contemporary Artist



CREATOR INTERVIEW

No

168

ヤノベケンジ Kenji Yanobe

1965年大阪府生まれ。現代美術作家。1990年、隔離タンクの中で瞑想する体験型の作品《タンキング・マシーン》でデビュー。

「現代社会におけるサヴァイヴァル」をテーマに機械彫刻を制作。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群で国内外で評価される。1997年より、放射線感知服《アトムスーツ》を身にまといチョルノービリ（チェルノブイリ）や大阪万博会場跡地を訪れる《アトムスーツ・プロジェクト》を敢行（～2003年）。21世紀の幕開けとともに、制作テーマを「リヴァイヴァル」へと移行。2003年、国立国際美術館（大阪万博会場跡地）で集大成的な個展「メガロマニア」を行う。

2004年より、実父の腹話術人形「トラヤン」をキャラクターとするシリーズを開始。2004～05年、金沢21世紀美術館の開館に合わせて、全長7.2mの《ジャイアント・トラヤン》を滞在制作。2011年、東日本大震災後、希望のモニュメント《サン・チャイルド》を制作し、国内外で巡回。3体のうち1体が茨木市（大阪）に恒久設置される。2017年、福を運ぶ旅の守り神《SHIP'S CAT》シリーズの制作を開始。2021年、大阪中之島美術館に《SHIP'S CAT (Muse)》が恒久設置される。2024年、生命の旅をテーマにした巨大インスタレーション《BIG CAT BANG》をGIZA SIX中央吹き抜けで展示した。

創作の原点は幼少期に大阪万博会場が解体されていく現場「未来の廃墟」で遊んだこと。美術の起源や存在意義を問い、環境と相互作用をもたらす作品を制作している。

No

168 ヤノベケンジ 現代美術作家

KENJI YANOBE / Contemporary Artist

創造のエネルギーを、美術館に閉じ込めずに解放する。

クリエイターインタビュー

『人々が熱狂する荒唐無稽なアートで街に「事件」を起こす』

published_2025.06.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

宇宙服をまとった巨大な猫や、黄色い放射能防護服を着てほほ笑みを浮かべる子ども、防護服を着たバーコード頭の腹話術人形……。インパクトの中にかわいさやユーモア、そしてアイロニーが同居するキャラクターたちの生みの親、ヤノベケンジさん。ジャパニーズポップカルチャーの黎明期に、サブカルチャーの要素をいち早く取り入れた作品を発表し、今なお第一線で活躍を続ける稀有なアーティストの原点とは。現在は、大学で次世代のアーティストを育てる立場でもあるヤノベさんの、30年以上におよぶ活動を紐解いていきます。

“未来の廃墟”で育まれたイマジネーション。

六本木との関わりで思い出すのは、2004年の展覧会です。森美術館が開館した翌年、第2回目の企画展となる「六本木クロッシング」に呼んでもらいました。そのグループ展は、《トラヤン》という僕のキャリアのなかでもかなり重要な作品が、形になった場でもあるので思い入れがあります。《トラヤン》は腹話術人形から派生したキャラクターで、前年の2003年に国立国際美術館で開催した「MEGALOMANIA」の個展をきっかけに誕生しました。



《トラヤン》

バーコード頭にちよび髭、ポーランド民謡を歌う世紀のトリックスター。ヤノベさんの父親であるヤノベマサノブさんの腹話術人形が原型。その後、さまざまな形態に変容させながら作品としての世界観を広げる。
画像：（撮影）豊永政史



近作展29 ヤノベケンジ MEGALOMANIA

2003年に国立国際美術館（当時・吹田市）で開催されたヤノベさんらしいユーモアと批評性が融合した、体験型のインスタレーション展。エキスポタワーの解体部材を使った新作を含む約40点を展示し、ヤノベさんが体験した「未来の廃墟」への時間旅行を鑑賞者が追体験できる空間が話題になった。
画像：（デザイン）豊永政史

僕の生い立ちを少し話すと、1965年大阪生まれの大阪育ち。1970年の大阪万博があった翌年に、万博会場跡地の近くへ家族で引っ越してからは、万博の取り壊し現場が僕の遊び場になっていました。太陽の塔の周りのパビリオンが次々とつぶされ、「大屋根」と呼ばれた丹下健三さんの建物の下に、磯崎新さん制作の「デメ」というロボットが放置されていて……。未来の廃墟ともいえるその風景は、僕のイマジネーションの原点になっています。

実は国立国際美術館は、今は大阪の中之島に新築移転していますが、もともとは万国博美術館として建てられた建物を転用していたんです。建物の老朽化に伴い解体されることになり、そのクローキングに個展の開催が決まったときは、うれしかったですね。僕の活動としても集大成といえる内容にしたくて、大阪万博ひいては岡本太郎さんの思想にぶつかりながら、未来都市の廃墟となった万博跡地にこれまでの作品を並べて、妄想都市を移植するような構成にしました。もう作家をやめてもいいくらいの意気込みで、全身全霊で挑んだプロジェクトでした。



国立国際美術館

大阪・中之島にある現代美術を専門とする国立の美術館。1977年大阪万博の跡地に開館し、2004年に現在の大阪市・中之島へ移転。建築家シーザー・ペリが設計した完全地下型の建物が、都市空間にアートのような存在感を与えている。

父親の腹話術人形から生まれた、トラヤン。

《トラヤン》がいかにして生まれたかという、父親が定年退職後に、腹話術の趣味にはまったことがきっかけです。父は、僕がアーティストになることを昔から反対していたのですが、家からほど近い万博記念公園での息子の個展開催がよほどうれしかったのか、設営中から毎日遊びに来ていました。そんな父が僕のすべてを出し尽くしたともいえる展覧会のオープニングで、美術館から勝手に持ち出したアトムスーツを腹話術の人形に着せてショーを行ったんですよ。ダミ声で不器用な父が、アトムスーツを着た腹話術人形を操る mismatch を想像してみてください。シュールだと思いませんか？（笑）ある意味、この運命的な事件をきっかけに、インスピレーションが降臨してきました。腹話術人形にバーコードのかつらとちよび髭をつけて、“トラヤン” っていう名前のキモカワとっちゃん坊やのキャラに改造したら、しっくりきたんです。

翌年の、森美術館でのグループ展に参加してほしいという依頼があったときも、アイデアが何も思いつきそうにないので最初は断るつもりでした。けれど、ちょっとした遊び心から、“森美術館だから森の映画館” という設定で、木の小屋の前で《トラヤン》が踊っているセルフパロディのスケッチを描いてみたんです。木の小屋に見える建物は、実は核シェルターの役割を担った堅牢な鉄のシェルターで、中では腹話術ショーの映像が流れている。それは僕の父親から孫に対する、何かあったときにはここに隠れて生き延びてくれよ、という悲しい遺言でもあるんですが……。これもある意味運命的に生まれた作品と言えるかもしれません。

第1回六本木アートナイトでの伝説的パフォーマンス。

その後、再び六本木に戻ってきたのが、2009年に初めて開催された六本木アートナイトです。一夜だけ街をアートで彩るイベントをやりたい、という依頼をいただいた際にまず思ったのが、単なるお飾り的なことをやっても意味がない、ということでした。その頃の《トラヤン》は、増殖や巨大化を遂げながら、2005年には《ジャイアント・トラヤン》という火を噴く巨大なロボットに進化し、金沢 21 世紀美術館や豊田市美術館などで、アトラクショナルな魅力を放ちつつ展示されていました。今度は美術館を離れ、トラヤンを街に繰り出させたいと思いつき、引き受けることにしたのです。

初開催だからこそ多少の無茶はできるだろうと踏んで、《ジャイアント・トラヤン》がディズニーランドの電気カルパレードのような台車に乗って、火を噴きながら六本木界隈を練り歩くアイデアを提案しました。「それくらいのことをやる覚悟はありますか？」と実行委員会の方々に聞いたら、意外にも乗ってきてくれて（笑）。自衛隊から戦車を呼んで、昔の刑事ドラマ『西部警察』みたいに車が爆破されるアイデアはさすがに採用されませんでした。要はそのくらいの“事件”にして、街全体を非現実的な状態に置くことが、新しいアートや文化の創出につながる。1回目にふさわしい強烈なインパクトを残せたと思っています。



《ジャイアント・トラヤン》

2009年3月28日から29日にかけて開催された第1回「六本木アートナイト」では、代表作《ジャイアント・トラヤン》を六本木ヒルズアリーナに展示。全長7.2メートルの巨大な赤ちゃん型ロボットは、歌い、踊り、口から火を噴くというパフォーマンスを披露し、来場者に強烈なインパクトを与えた。

画像：（撮影）KENJI YANOBE Archive Project

ちなみにこの《ジャイアント・トラヤン》のパフォーマンスの構想は、フランスを本拠地に置くラ・マシンというパフォーマンスグループの活動からインスピレーションを得ています。幼少期に見た、岡本太郎さんの《太陽の塔》をはじめとする作品にイメージの限界をすでに外してもらっていたので、荒唐無稽と思われるような発想じゃないと、僕自身も面白みを感じられないのです。



《La Machine (ラ・マシン)》

《ラ・マシン》は1999年に設立されたフランソワ・ドラロジエールが監督を務めるストリートシアターカンパニー。機械仕掛けの巨大なオブジェクトなどを制作。さまざまな演劇や世界各地のイベント、都市計画のプロジェクトなどに参加している。

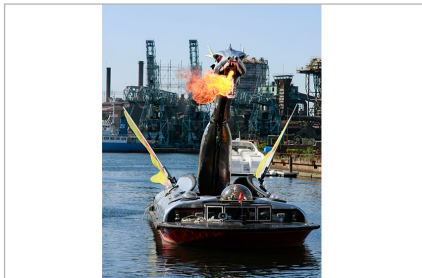
ヤノベケンジ 現代美術作家

KENJI YANOBE / Contemporary Artist

published_2025.06.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

アートには都市の規制を緩め、可能性を引き出す役割がある。

僕が担当した第1回の六本木アートナイトと同じ年、大阪では「水都大阪 2009」というイベントが開催され、《ラッキードラゴン》という作品が、火を噴きながら道頓堀川を泳ぎました。当時、知事だった橋下徹さんが推進していた文化予算削減の政策に対するアンチテーゼの意味も込めた作品だったのですが、最終的には大阪文化賞を受賞しました（笑）。同年、大阪府ではあらためてアートの力を街づくりに生かす目的で「おおさかカンヴァス推進事業」が発足。大阪をカンヴァスに見立て、世界中からアーティストを公募するプロジェクトの審査員やプロデューサーを務めていました。都市にある規制の枠を超えたアートの可能性をあらためて実感しています。



《ラッキードラゴン》

「水都大阪2009」で発表された、トラヤン専用のアート船。遊覧船を改造して制作。作品タイトルは、1954年にマーシャル諸島ビキニ環礁で、アメリカが行った水爆実験で被曝した、遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」の英語名。

画像：(撮影) 塚正玲子

東日本大震災後は《サン・チャイルド》という作品を制作し、2018年には福島市の公共の場に設置されたその像が、撤去される騒動も起こりました。SNS 上で賛否両論の意見が飛び交いましたが、社会とアートの関わり方がどうあるべきか、最前線で実践して戦ってきているところがあります。業界で生きていくためには、マーケットを捉えることも、歴史や文脈を踏まえることも重要ですが、人間の創造のエネルギーはもっと尊い。美術館やギャラリーのような枠組みに閉じ込めるべきものではない、と思っているんですね。



《サン・チャイルド》

右手に希望を象徴する「小さな太陽」を持ち、左手にヘルメットを抱える、全長6.2メートルの子ども像。防護服姿でヘルメットを脱いだポーズや、胸元のゼロのカウンターが、放射能の心配のない世界を取り戻した未来の姿を表している。2011年制作。画像は2018年に福島市の公共空間に恒久設置されるものの、1か月あまりで撤去に至ったもの。

画像：(撮影) KENJI YANOBE Archive Project

そういう考え方がベースにあるのも、太陽の塔や万博の跡地の原風景が、リミッターを外してくれたからなのでしょう。言ってしまうと、何もなくなってしまった未来の廃墟だから、何でもできるという意識が、常に根底にあるのかもしれません。

ヤノベケンジ 現代美術作家

KENJI YANOBE / Contemporary Artist



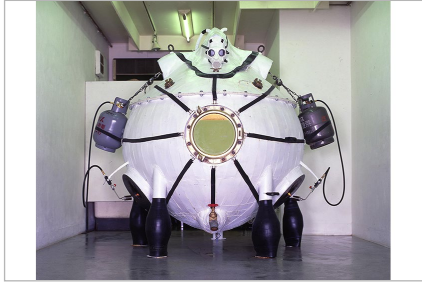
published_2025.06.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

世界が抱える社会問題に、アートでどう対峙するか。

子どもの頃から、「図画工作が好きなケンジくん」でした。漫画が大好きで、祖母の家が本屋をしていたので、ひとり漫画喫茶状態で漫画を読み漁っていました。あるとき、祖母からもらった藤子不二雄[®]『まんが道』の自伝的な物語に衝撃を受けて、「自分で漫画の本をつくりたい!」と思うようになったんです。

小学5年生のときにつくった漫画雑誌が、友だちが回し読みをするほど好評で、めちゃくちゃ喜んでもらったことがあったんです。これが、自分の作品が第三者に認知された原体験になっています。その後、SF映画ブームが到来して特撮に興味を持ったのを機に、立体物をつくるなら芸大に行けばいいんじゃないかと考え、アートの道に足を踏み入れました。

大学で彫刻科に進み美術を学び始めたら、直感的に「ここにはまだブルーオーシャンがある」と感じて、1990年、大学院2年生のときに《タンキング・マシーン》という作品を発表しました。前年の1989年秋、ちょうどベルリンの壁が崩壊したタイミングで訪れたイギリスでの交換留学の経験がこの作品に大きく影響しています。激動の世界情勢を間近で感じながら、外から日本を俯瞰するいい機会になりました。



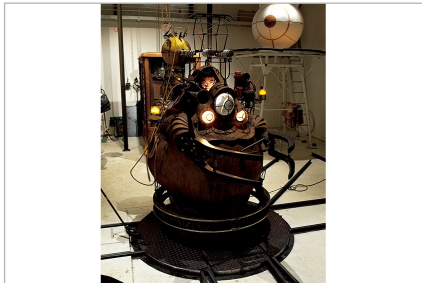
《タンキング・マシーン》

白いガスマスクを装着した人型のカプセルで、タンク内部は人肌に温められた、羊水と同じ塩分濃度の生理食塩水で満たされている。中に入った人は、視覚や聴覚などの感覚機能を剥奪された状態で浮遊し、瞑想状態に入ることができる。1990年制作。

現代美術については、当然、欧米の文脈に沿って学ぶこととなります。例えばナショナル・ギャラリーでゴッホの絵を鑑賞している子どもたちの横で、自分はこれを教科書で見たなと思うわけです。その一方で心に抱いたのは、本来の気候風土にそぐわないものを、美術教育として受けてきたのではないか、という疑問。サブカルチャーこそが、本当の意味で自分を変えてくれたという気づきから、自分にとっての美の核をはっきりと確信したのです。そんな想いもあって、ポップカルチャーの要素を盛り込んだ《タンキング・マシーン》は、母胎内回帰をテーマに自らの原点に戻ることのできる瞑想タンクに入ってイメージーションを爆発させることで、第二の誕生を目指すというストーリーを込めました。

アートの歴史を紐解くと、洞窟画から始まり、その後は長く宗教のために存在してきました。信仰と切り離すことのできない長い歴史があるなかで、日本人で、しかも現代に生きる僕たちが、アートを通して何を表現できるかということ、社会問題に尽きると思うのです。世界が抱えるさまざまな問題にどう対峙するかが、アート表現としてのひとつの答えの出し方であって、誰にも役に立たないものをつくるのではなく、もっと世界を変えていくための装置としてつくるべきなのではないか。その想いから、「現代社会におけるサヴァイヴァル」をテーマとした制作を始めました。

日本で原発事故が起こったときにも、逃げずに体当たりでぶつかっていく気概でものづくりに向き合いました。美術館やギャラリーの守られた空間ではなく、誰も言わないようなことを、あえて問題の起こっているエリアのど真ん中で表現したのです。ぶつかって、もみくちゃにされるリスクはありましたが、ネガティブな意見が出たとしても自分のポリシーは貫きたいな、と。



《サヴァイヴァル・システム・トレイン》

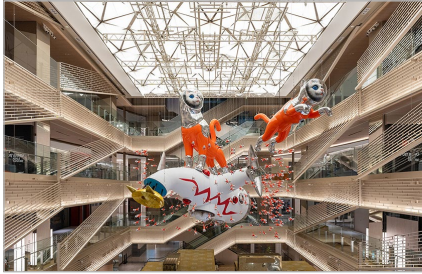
1991年、大阪万博と深い関わりを持つ美浜原発（福井県）で事故が発生。大きな衝撃を受けたヤノベさんは、「現代社会におけるサヴァイヴァル」をテーマに、《イエロー・スーツ》や《サヴァイヴァル・システム・トレイン》など実機能を持った作品を制作。1997年には、放射線感知服《アトムスーツ》を身にまとい、チェルノブイリなどを訪れる《アトムスーツ・プロジェクト》を開始する。画像は《サヴァイヴァル・システム・トレイン》。

画像：（撮影）黒沢伸

いい作品かどうかは、見た瞬間にわかる。

作品のコンセプトやストーリーは、いくらでも言葉にできるし、後づけも可能ですが、かわいさや品といった美意識は、言葉で表現しようのない感覚的なことですよね。僕があくまでも大事にしているのは、理屈ではなく感覚。いい作品ってというのは、考え方や文脈、コンセプト、歴史、メッセージなどが、見た瞬間にわかってしまうものなのです。

だからこそ、見る人が自由に想像力を膨らませられるように補足は最小限にとどめておきたい。GINZA SIXの《BIG CAT BANG》なんて、見るからにバカバカしいじゃないですか。だって、猫大爆発ですよ（笑）。でもこの作品にはちゃんと、「芸術は爆発だ」という言葉を遺した岡本太郎さんに対するリスペクトが込められています。生命の誕生は約 36 億年前と言われているけれど、そもそもどこから来たのか。宇宙から来たという説を宇宙猫のキャラクターに託し、生命を育て上げて絶滅した宇宙猫の生き残りが、今の猫なのではないかという問いを含んだストーリーをちょっと加える。それだけで、自分の飼っている猫はいつもダラダラして、ニャーニャー鳴いているだけだけど、とてつもないミッションを遂行するために宇宙から長い旅をしてきたのかもしれないって想像力をかき立て、見る人を妄想の世界に連れ出してくれるのです。

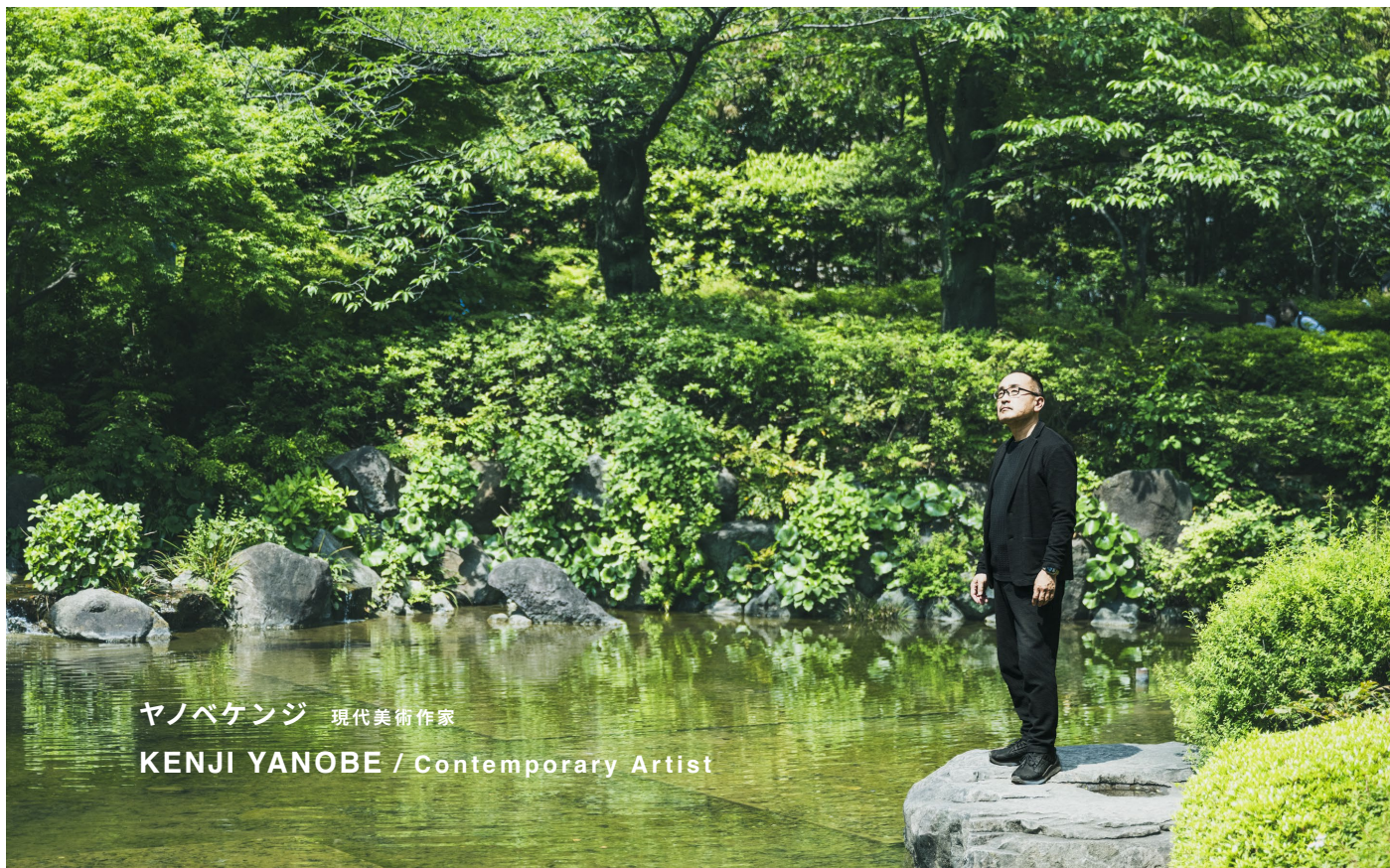


《BIG CAT BANG》

旅をしながら福を運ぶ《SHIP'S CAT》シリーズから派生した、2024年4月5日、GINZA SIXの中央吹き抜け空間に登場した大型インスタレーション。岡本太郎の《太陽の塔》の形をした巨大宇宙船「LUCA号」に乗ってやってきた宇宙猫が空を舞う。

画像：（撮影）Takaki Yasuyuki

僕は天才でも何でも無い。一言で言えば、ただのアンテナみたいな存在で、時代のなかで何者かに託されたことを引き受けてやっているだけ、という感覚なのです。使命でもない限り、こんなにいろんなことをやらせてもらえるはずがない、と思っているんです。



ヤノベケンジ 現代美術作家

KENJI YANOBE / Contemporary Artist

published_2025.06.25 / photo_tada / text_ikuko hyodo

ものづくりをする姿を見せることが、最高の教育。

京都芸術大学では、実践教育現場として「ULTRA FACTORY」という工房のディレクターを務めると同時に、プログラムの一翼を担うアーティストとして学生たちと向き合っています。「想像しうるものはすべて実現可能」とうたっているだけあって、第一線で活躍するクリエイターの制作を手伝いながら、そのノウハウを目の当たりにすることができる魅力的なプロジェクトです。ディレクター陣も米山舞さん、名和晃平さん、明和電機など、それはもう豪華な顔ぶれですよ。



ULTRA FACTORY

京都芸術大学の全学生が利用できる、造形芸術支援工房。2008年6月に設立。第一線で活躍するアーティストやデザイナーを迎えて実施される「ULTRA PROJECT」など、さまざまなプロジェクトを展開。芸術家の創造力と美意識、職人が持つ高度な技術と制作への情熱を融合させ、社会的自覚を持って行動できる人材の育成を目指している。

画像：（撮影）表恒匡

学生にとって神のような人たちが集まる場所になっているのは、クリエイターにとっても魅力を感じる場所になっているから。ファクトリー内でのアワードもありますし、ここから育ったクリエイターがTOKYO MIDTOWN AWARDに応募もしています。エネルギーが充満している、クリエイティビティのつぼのような空間で、僕自身も刺激を受けてアップデートされるような実感があります。



TOKYO MIDTOWN AWARD

東京ミッドタウンが「"JAPAN VALUE" (新しい日本の価値・感性・才能)を創造・結集し、世界に発信し続ける街」をコンセプトに、才能あるデザイナーやアーティストとの出会い、応援、コラボレーションを目指して、デザインとアートの2部門で開催するコンペティション。アイデアや作品を生み出すことのできる「人」にフォーカスしている。ヤノベさんは2023年よりアートコンペの審査員として参加。

<https://www.tokyo-midtown.com/jp/award/>

みんなが悔しがらうくらい、つくり続けて、生き延びる。

アーティストにとって一番怖いのは、想像力の枯渇です。お金とかは別にいいんです。それよりも、つくるものがわからない、新しいものが出てこない状況は、生きる意味を失ってしまうことと等しいと思っています。だから学生に対しては逃げも隠れもせず、つくり続ける姿をずっと見せたい。「ヤノベさんは常にもものをつくっているし、どんなことがあってもくじけない」とみんなが悔しがらうくらい、つくり続けて、生き延びるつもりです。

僕にとってのものづくりは、小さい頃から変わらず、最も尊い時間です。小学生の夢のように「できたら面白いけど、無理だね」と多くの人が真に受けないことを、実際に形にしているだけのこと。荒唐無稽なアイデアをニヤニヤ笑いながら、面白がってくれる人がいるからこそ、自分らしさを肯定できるのがアートだと思っています。六本木アートナイトに参加した頃から、僕は常に祭りをやっている感じですね。

撮影場所：六本木ヒルズ 毛利庭園

取材を終えて……

大阪弁で軽快に笑いを交え、常にこちらを楽しませながらお話ししてくれたヤノベさん。アートに対する思いを熱く語っていたかと思えば、照れ隠しなのか急に冗談を言ったり、すっと引いて答えをはぐらかしたり。それでも、図画工作に夢中になっていた“ケンジくん”の頃から変わらないであろう、ものづくりを信じる純粹さは、しっかりと伝わってきました。ときに矢面に立ちながら、制作の全責任を引き受け、作品を通して世界を変えようとする姿は、学生はもちろん、あとに続くアーティストにとって言葉以上の学びがあるはずです。本当にみんなが悔しがらうくらい、この先もつくり続け、私たちに熱狂させてください。(text_ikuko hyodo)